

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	櫻田智恵
論文題目	「国王神話」の形成過程—タイ国王の行幸と「陛下の映画」の役割—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、タイの9世王プーミポンアドゥンヤデート(1927-2016年、在位1946-2016年)が、国民から敬愛を集めて、絶大な政治的権威を獲得する過程を描き出そうという試みである。多くの人々は学校教育やメディアが拡散するイメージを通じてプーミポン国王を敬愛している。そのイメージは国王崩御後も再生産され続け、プーミポン国王は神話になりつつある。本論文は、地方行幸が人々に国王への敬愛を抱かせ、その神話の形成と再生産の鍵になっていると位置づけて、行幸を包括的に分析している。</p> <p>第1章では、近代以後のタイの王朝を取り巻く歴史が叙述される。19世紀後半に築き上げられた絶対王政は、1932年の革命で立憲君主制へと変化する。君主と取り巻きは、低下した権威の回復を目指すようになる。この作業を中心となって担ったプーミポン国王による権威確立過程を政治史と照らし合わせながら概観する。</p> <p>第2章では、プーミポン国王神話の内容を整理する。複数のイメージが互いに補強し合って人物像が作り上げられている。科学者、芸術家、灌漑専門家、英邁、高德といった具合に複合的であるがゆえに、どんな局面でもそれに合致したプーミポン国王のイメージを語るができる。そうしたイメージが学校教育や御真影を通じて広められたことを叙述している。</p> <p>第3章では、プーミポン国王の公務にはどのようなものがあるかを紹介し、公務の中では地方行幸がもっとも重視されていたことを示す。次に、どの時期に、どの地域へ、どのような形態で行幸していたのかを丁寧にたどる。それを通じて、行幸の回数は実際には公式発表よりも少ないこと、行幸先には偏りが大きいことを明らかにしている。また、プーミポン国王が身近な国王として自身を演出していたこと、それによって民衆から敬愛を獲得したこと、加えて1970年代半ばには民衆を訪問して大規模な奉迎を受けるスタイルから開発重視への転換が生じることを明らかにしている。</p> <p>第4章では、1955年に行き当たりばったりで始まった地方行幸が、奉迎の様式確立によって、国王と民衆の一体感を演出する場になっていく過程を描き出す。奉迎が盛大なセレモニーとして演出されたのである。民衆は奉迎によって臣民としての一体感を体験することになった。</p> <p>第5章では、奉迎の舞台裏が描かれる。初回の中部行幸では、想定外の出費や随行員の過大な負担といった問題が噴出していた。それを克服するために、奉迎セレモニーの様式が確立される過程を説明する。事前の清掃などの準備作業、当日の参集、国王賛歌演奏、万歳三唱、国王の演説、といったパターンが確立される。</p>			

第6章では、奉迎に参加していなくても、奉迎体験を共有できる仕組みとしての映画について述べられる。行幸する国王の姿を爆発的に拡散させたのは、国王を被写体とし、しかも国王自身が制作を指揮した「陛下の映画」であった。それが制作され上映される過程を詳述する。しかも、上映や鑑賞に当たっての正しい礼儀作法が定められ、民衆は鑑賞を通じて奉迎を擬似的に経験させられるようになった。

終章では、ここまでの議論を要約する。なぜ人々がプーミポン国王を敬愛するようになったのかという問いについて、実際の行幸と映画の二本立てであったという答えを提示する。a)1950年代に始まる地方行幸において民衆が拝礼するような奉迎方法を確立し、b)行幸の様子を撮影した映画を民衆に拝礼するような作法で鑑賞させた。この2つが噛み合って、行幸は国王への敬愛を喚起する役割を有効に果たした。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、即位後に絶対的な権威を確立していったタイの9世王プーミポンアドゥンヤデート（在位1946-2016年）が、どのようにして国民の敬愛を集めるに至ったのかを歴史的に解明しようと試みている。国王は地方で住民に見せる「身近な国王」の顔と、首都の儀式で見せる「威厳ある国王」の顔を使い分けることによって王室の権威回復に努めた。本論文は、身近な国王の演出にとって重要なのは地方行幸であり、しかも地方行幸の回数が増える1970年代よりも、初期の1950年代が重要であると捉える。行幸そのものに、奉迎セレモニーとその様子を記録した映画が加味されて、全国民が行幸を一大ページェントとして共有するようになったのは初期の行幸においてだったからである。

本論文は次の3点でタイ地域研究への学術的貢献を高く評価できる。第1に、プーミポン国王の地方行幸について詳述していることである。先行研究と比べて調査の徹底ぶりが群を抜いている。公務記録を丹念に読み込むことで、いつ、どこへ、どのような目的で行幸が行われたのかを風潰しに調べ上げている。それによって新しい発見をしている。たとえば、地方行幸の回数が実際よりも多く発表されており、その理由は行幸の回数が多いほど、「国民に身近な国王」として演出しやすいからであると論じている。また、全国各地を訪問したというイメージがあるものの、実際には全国4箇所のみで行幸が多かったことを指摘している。

第2に、行幸そのものにもまして、奉迎が重要であったことを実証している。地方行幸で肝要なのは、多くの民衆が出迎えに集まり、国王への忠誠心を表現し、国王の肉声を聞くことであった。つまり、盛大なセレモニーの演出である。初回の1955年の中部行幸は行き当たりばったりであったものの、同年の東北行幸では事前に奉迎の式次第が定められた。続く1958年の北部行幸を取り仕切った内務官僚は、奉迎セレモニーの方法を詳しく説明したマニュアルを試行錯誤の末に完成させた。その手引書は改訂されつつ今日まで継承されてきている。手引書通りの画一的な奉迎方法が全国各地で繰り返されたというのは、奉迎の作法が確立されたこと、そしてその作法に従い民衆を賤げたことを意味していると論じている。

第3に、地方行幸の現場に居合わせなかった民衆にも行幸奉迎体験を共有させる手段として映画が重要であったと指摘する。映画制作を任されていた国王側近の回想録などに依拠しながら、「陛下の映画」と呼ばれるものの実態を解明している。それは国王が主演を演じ、しかも制作・編集も指揮した映画であった。積極的に巡業上映が図られた上に、鑑賞に当たっての作法が決められた。鑑賞者は、実際の奉迎に立ち会った民衆と同様に、国王の分身としての映画を疑似奉迎のように経験した。1950年代に始まる地方行幸で、民衆をひれ伏させるような奉迎方法を確立し、行幸の様子を撮影した映画をひれ伏させるような礼儀作法で鑑賞させたわけである。「陛下の映画」は、さらに、その

一部を映像や静止画として切り取り編集し再生産することが可能なため、メディア媒体が映画、テレビ、インターネットといった具合に変化してもなお広まり続けており、プーミポン国王を永遠の存在にするためのツールとなっていると強調する。

以上のように、国王による地方行幸は、民衆による奉迎、国王主導の映画の制作・編集、民衆による映画鑑賞を通じて、国王への敬意や忠誠心を民衆の間に醸成した。本論文は、地方行幸、奉迎、そして映画という独創的な切り口から「国王神話」の形成を緻密に跡づけた労作であり、タイ研究にとどまらず、君主制研究やメディア研究にも寄与する優れた研究である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2020年1月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。